

### \*\*\* 幹部が現場へ足を運べ

ドナルド・トランプ氏・・・今、その一挙手一投足が最も注目される人物であろう。

ゴール直前で大方の予測、劣勢を跳ね返し、年明けの 1 月 20 日、第 45 代大統領として、アメリカ合衆国史上最高齢の 70 歳での就任が決まった。はじめて尽くしの極みは、政治または兵役が全く未経験の大統領が誕生することであろう。全く政治との関わりがないまま就任したのは 1953～61 年のドワイト・アイゼンハワー氏以来とされる。

祝意が各国から寄せられるなか、中露のように早速元首が秋波を送る大国がある一方で、大方は政治手腕が未知数の超大国トップの誕生と捉えているようである。我が国政府はとりあえず従来通りの蜜月関係を希望しているように映る。

さて、件の次期大統領、「移民への差別や女性蔑視の発言で支持率を落とす局面をものともせず、ポピュリズム的な暴言と対立候補への攻撃(口撃)により接戦を制したその生命力には舌を巻くばかり」と評されている。

長年、事態を変えられなかった政治エリートへの不満・反発が根強かったことの現れともいってよく、こうした傾向は日本にとっても他人ごとでは済まされない。「トランプ」はイギリスでは“切り札”を意味するそうであるが、現状に対する強い不満は果たしてどこへ向かうのであろうか。

選挙期間中には「偉大な米国の復活」、「アメリカニズム(米国第一主義)」を掲げてきたため、外交孤立主義、通商保護主義など内向きに傾くと見られている。現在、我が国国会で審議中の環太平洋経済連携協定(TPP)は承認しないと発言してきており、枠組みからの離脱が懸念される。また、共和党の主流派や伝統的な党支持者とも選挙中終始距離を置く立場をとってきたことから、予想される政権ブレーンは経験不足が指摘されている。

そんななか、勝利宣言では一転、「今こそ米国は分断から結束へ向かう時だ。私は全ての米国民の大統領になる。」と融和を呼び掛けた。

幸い、今回の選挙では、オバマ政権時代に続いた米議会のねじれも 8 年ぶりに上下院とも解消し、これまでより政策がスムーズに実現することとなる。

選挙公約に掲げた年 4% の経済成長や経済と政治の変革には世界の期待が高まっている。経済人らしく、ホワイトハウスから外に出て世の動きを感じとり、広い地球ではあるが現地の声を聴き、現実に応じた政策を実行・実現していくことを期待したい。

話は変わるが、ソニーの創業者である井深大氏と盛田昭夫氏は、後年経営に専念するようになってからも好んで研究所を訪れ、「それは何?」と技術者の背後から声をかけたという。「研究者にとって社長の靴音が何よりの肥やしだった。」と言われたように、新しい発想には緊張感が必要であったが、と同時に経営には消費者の趣向動向や新たな需要創出に敏感であることが求められるのである。

「幹部が現場へ足を運べ」は、実務者にとってばかりではなく、経営者にとっても欠くことのできない心構えと心得たい。

20161110 MS生

職業 不動産王、タレント

